北部信州の「心象」を豊かに語る人

片桐歩詩集『美ヶ原台地』に寄せて

鈴木比佐雄

1

片桐歩さんは、私にとって謎多き詩人だった。二〇〇六年頃に石村柳三詩論集『雨新者（うしんじゃ）の詩想』を編集する際に、片桐歩詩集の書評原稿があった。その書評を読み石村さんときっと深い関係を持つ詩人だということが分かった。今までその詩篇を読む機会の無い詩人として何か気にかかる存在であった。ところが石村さんの第二詩集『夢幻空華』が刊行された後に、コールサック社に片桐さんから電話があり、「石村さんの魅力が網羅されている、優れた詩集を作ってくれて、本当にありがとう」という意味のお礼の言葉を言われたのだった。その電話で石村さんと片桐さんは若い頃に同人誌で切磋琢磨しあった親しい間柄だったことが理解できた。片桐さんはとても穏やかで、自分のことのように旧友の詩集や詩論集の達成された価値を褒めたたえていた。このような生涯の詩友を持って石村さんは幸せ者だと感じたのだった。

片桐歩さんは、本名を大野孝夫といい、長野県松本市に一九四七年に生まれた。高校を卒業後に工学院大学に進学し電子工学を専攻したエンジニアで、仕事も電子分野に就いていた。学生時代から詩作を始め都内で就職後も「さざなみ」「砦文学」「渓流文学」「やまなみ」などの詩誌に参加して本名とペンネーム片桐歩を併用しながら詩作を続けていた。その後、故郷の松本に帰郷し一九七八年十一月に赤羽恒弘、柳沢さつき、平田美智子たちと月刊でタブロイド版の詩誌「やまびこ」を創刊し、市内の喫茶店などにも置き一般の人たちに詩を広めようと試みて、最後の一九九三年の一四八号の終刊まで中心的な存在だった。終刊号近くは毎月ではなくなったが、大半は毎月刊行されていて、片桐さんは詩を淡々と書き続けていた。「やまびこ」の始まり数号は大野孝夫の本名だったが、その後に発表する際は、必ず片桐歩のペンネームで通している。創刊号の短い詩「三月三日の朝」は味わい深い詩だ。

三月三日の朝

冷たそうな
ちょっと暖かそうな
気流の中に
青空の色を見ている
と
生きることの憐れさを
識る

片桐さんは故郷を十数年間離れていて、三十歳を越えて帰郷し故郷の青空を見詰めて、「生きることの憐れさを／識る」という詩行が湧き上がったのだろう。それを促した気流や風の動きから、触発される「心象」を詩の原点にしているのだと思われる。

片桐歩というペンネームの由来を同人中の一人が書いていた文章によると、地元の尊敬する新聞記者の名前によっていると語ったという。片桐歩という名の新聞記者を探してみると該当者がいないので、不思議に感じていた。しかし尊敬する新聞記者ということから推測すると長野では、戦前に軍部を批判した桐生悠々ではないだろうかと思いついた。本人に確認すると、やはり桐生悠々を尊敬していて一時は桐生の書いたものを集中的に読んでいたという。桐生悠々は、一九三三年（昭和八年）に信濃毎日新聞で「関東防空大演習を嗤う」を書き、十二年後の東京大空襲やその他の都市の空襲を予言した、気骨のある新聞記者だった。

山梨の石橋湛山や安曇野の清沢烈と同様に日本の破滅を予見し、言論の自由のないところが日本の最大の弱点であることを看破し、命を賭けて言論で軍部を批判し続けた自由主義者だった。そんな桐生悠々の権威におもねない反骨精神を片桐さんは根幹に据えて、故郷の松本に戻ってきたのだろう。地縁血縁の相互監視の中でも自由に表現活動をするために、片桐歩で詩作を本格的に試みていったのだろう。一時は桐生詩歩というペンネームでも書いたことがあったらしいが、少し言いにくいこともあり、北信濃によくある苗字だが響きの良い片桐にしたと言うことだった。歩は評論家大宅荘一の長男で夭折した詩人の大宅歩から借りたということだったが、将棋の歩（ふ）のように一歩一歩を大切にしたいという思いだったそうだ。片桐さんは時代を予見する反骨精神と純粋な詩人の魂を自らの中で融合させたい思いに駆られて、自らのペンネームにその思いを託して、詩作に生きようとしているのだろう。

2

片桐さんの年譜の初めに出てくる詩集は、一九七九年の詩誌のような無綴トジの詩集『*Pathos*』（二十六篇）だ。この詩集は「片桐歩詩集第六号」とサブタイトルがついている。つまりこの詩集の前にも五冊の手作り版の小詩集が刊行されていたらしい。この六冊の小詩集によって、片桐さんは、自己の詩のスタイルやリズム感を模索していたに違いない。片桐さんは初期詩篇の最後の第六詩集『*Pathos*』を自らの詩人としての原点にしているのかも知れない。その中から「心象物」という詩が特に心に残ったので、引用してみたい。

心象物

初夏のキラキラした陽
濃緑（モスグリーン）が
風に曲げられ
はねる
部屋を抜け
隣の竹やぶを
ザワザワと
渡っていく
土の上を蟻が
歩き廻る
せわしい土曜日の午後
穏やかな惰性に
吹かれ
思考意識の回復を
見詰める

混乱の社会から
はみ出す私心は
止まった模写図の
放心状の眼球
動く
蟻の顔
触覚の巧みさ
目覚まし時計が
確かな音を伝える
ふと現実と掛け離れた地が
経験物と
まだ見たことのない生物が
ひとつに重なり
薄くなったり
濃くなって
ちらつき
手を延ばしたところに

知覚する像の
まどろみ

さらさらした陽に
白い布の中に吸収される事象体が
ひとつ
ひとつ
消えていく

この詩を読むと、感受性の強い若者が故郷を出て都会生活の中で、様々な物事を見聞きし、思考することに目覚めていき、また表現者として創造的な「心象」の世界を生み出していく精神過程が記されていると私には感じられる。溢れ出てくる「濃緑の陽」の光が、土曜日の昼下がりにやってきて「思考意識の回復」を促すのだろう。「混乱の社会」の非人間的な仕打ちを「濃緑の陽」が融かして、「心象」の中から自分にとって本物とは何かを問いかけられて検証していく。そして「まだ見たことのない」未知の「心象物」を探り続けていこうとする、純粋な詩的精神を垣間見ることができると思われる。詩的情熱と世界の構造の両方を鷲掴みしたいと言うような若々しい精神が息づいているような詩だろう。

3

第七詩集『KARMA』（四十四篇）は一九八八年に刊行された。その中で「対話」という詩を読んでみたい。

対　話

季節はめぐり
大気の流れにのって

おりおりの衣を脱ぐ
滅びさるものと
生まれるもののなかで
すれ違う痛みを
悲しむべきか
喜ぶべきか
金色の陽に飛ぶ
とんぼの群れに
何を語るべきか
死後の話しでもしようか
それともあなた達が生まれてくる
未来のことでも話そうか
澄んだ地上に咲いた
草花のきばみは増し
樹はぽろぽろと枯葉を
降らす

仮死の冬が山の上に
舞いおりてきた

片桐さんの感受性の特長は、この詩の中に良く現れている。それは「大気の流れ」を感受して、「滅びさるもの」と「生まれるもの」の双方の存在に気付いて、その大気の中に現れた生と死の在りかを、何か自然に書き留めてしまうのだ。またそれらの二つの存在が「すれ違う痛み」も感じて複雑な思いを抱いてしまうのだ。また「金色の陽」を人一倍受け止めてしまい、その光と風の中を漂うトンボたちとも自然と対話してしまうのだ。そんな眼に見えないものと死後や未来のことなどを対話しようとすることが、片桐さんにとって精神的な実在であり、「心象」であるのかも知れない。このような感受性のあり方は、宮沢賢治ともかなり近いと思われる。その意味で片

桐さんの膨大な数多くの詩篇は、賢治のいう「心象スケッチ」の試みを実践しているのかも知れない。「KARMA」という詩はどこにもないので、片桐さんにとっての「KARMA」（業）とは、このように「心象」を感受してしまう人間の果てしない精神の在り方を暗示していたのかも知れない。

4

一九九一年に第八詩集『瑠璃色の時』（三十五篇）、一九九三年に第九詩集『六月の歌』（二十一篇）、一九九五年に第十一詩集『予感の地平』（二十六篇）、二〇〇二年に第十二詩集『渇いた季節』（五十六篇）、二〇〇七年に第十三詩集『不条理の森』（五十八篇）などの詩集を刊行してきた。この六冊には、帰郷した後の暮らしの中で様々なものを断念しながら、故郷の四季の自然や天上の宇宙への交感を書き記している。『不条理の森』の中の詩「心地よい現象」には、その宇宙との交感が豊かに描かれている。

心地よい現象

この地上には永遠に存在するものなどない
もしあると思うなら
それは観念の中にあるロマンにすぎない
しかし異次元の空間には
あるのかも知れない
その所在をあなたに教えよう
窓枠に縁どられた色のある風景と
ブルーの空
暑い日の木陰の下に映る
乱反射の白いさざ波
風がすすきの穂を散らす
種子の行方

凍りついた大地に白い蒸気が
立ち昇る様
川の流れくだる水の音に
眠る感覚
生き物が受ける自然の
安らぎの響きのようで
体がほぐれるいやしの調べ
飽きのこない泉のざわめき
何か懐かしい家に帰ったような
心潤う音調が
脳細胞に住みついた
遥かな宇宙の音信に
耳を傾けると
闇の中で正体不明の音が
何かを話したがる
その音を読み取る機能はないが
ツードト　ツードトと
単純明快な信号を
送ってくる
空気の振動

このような自然の「心潤う音調」に聞き入る心持ちを都市の人間たちは忘却してしまった。片桐さんはこの「遥かな宇宙の音信」に耳を傾けて、「異次元の空間」との交感の中に永遠を感じようとしている。そのような無垢の自然との交感の中に「心地よい現象」が現れてきて、それを片桐さんはこの詩のように書き記していくのだ。自然を支配できると過信していった人間は、原爆や原発を作り、とんでもない事故を繰り返し引き起こして、取り返しのつかないことをしてしまった。このような自然を支配できることを前提とした大規模プロジェクトは、どこか根本的な人間の理性の絶対化に陥っている。片桐さんは理系の人間だが、

科学技術を絶対化するのではなく、むしろ科学では計り知れないもっと大きな異次元の世界に意識を遊ばせて、人間の精神の回復を願っているような思いを感ずる。

5

新詩集『美ヶ原台地』は五十二篇の詩から成り立っている。一章「美ヶ原台地」は二十六篇から成り立っており、冒頭には「心象」という詩がおかれている。

心　象

あい色の山脈(やまなみ)が雄壮な影絵をおとし
刹那の景象をとどめる日没
最後の残照がはなばなしい
火柱を吹きあげ
大気の層に投げいれた火焔が
のたうち回る
あかね色の微笑
光と闇が拮抗し合う
あがきの争いに屈した地上に
淋しい夕暮れが下りる
外灯に群がる昆虫の羽音が
闇をゆさぶる
高原の星屑

夕暮れの詩は数多く書かれているが、このような山脈全体を眺望する大パノラマの夕焼けから星空に移行するスケールの大きい詩は、読んだ記憶がない。この詩は片桐さんが故郷の光景を慈しんでいながらも、心の中でデフォルメし立体的な造形美を創造しようとしていることに気付かせてくれる。けれどもその変形作用によって片桐さんの

「心象」でありながらも、多くの読み手の夕焼けの光景となって他者の「心象」になるかも知れない。他の二十五篇は、片桐さんが故郷の自然を歩きながら、その移り行く四季の魅力を再発見していく驚きに満ち溢れている。その繊細な四季の出来事は、一回限りの命が生まれ死んでいき、また新たな命となって甦り輝きだす存在として語られる。片桐さんは誰はばかることなく四季に現れる命の輝きを賛美する人になっている。「心象」を序詩として、この二十五篇は一大交響曲となって読むものの心に北アルプスの美ヶ原台地の光景が響き渡るだろう。

二章「隣人はどこに」（十二篇）は、片桐さんの生と死について考えられた実存的な詩篇から成り立っている。人間存在の悲しみに踏み込んだ詩篇で、片桐さんは心の奥底に潜む不安をあえて掻き毟るような思いを詩にしている。片桐さんはその意味で生きることに誠実であり、詩にもその真剣な問いそのものが読むものに清々しさを与えている。隣人愛、神への愛なども片桐さんは問うていて、愛を問うことが人間の生きる重要なテーマであることも示している。

三章「幸せの国」十四篇は、片桐さんの存在への問いであり、地球の命への問いであり、宗教的な問いなどを含めて一篇一篇に硬質な問いかけがされている詩篇だ。最後に詩「幸せの国」を引用したい。「幸せって何処にあるのですか」と問う詩は宮沢賢治の他者の幸せを心から願う精神と根底で通じ合っている。片桐さんは現実には存在しない「幸せの国」の可能性をいつも問い続けているのだと思われる。そんな問いを発する詩は、とても尊い魂を抱えていることの証拠である。北部信州をこれほど慈しみ創造的な「心象」として書き上げた詩集はなかったのではないか。多くの人

びとに読んで欲しいと願っている。

幸せの国

幸せって何処にあるのですか
幸せの形　大きさは
方程式で解けるのですか
いや数値では測れないでしょう
それは困ったことです
沈黙のあと
では旅に出てみよう
分け入っても風景と人々の生活しか
何もみつからない
無量の地でした
仕方がないので
家でじっくり考えてみます
詩人の言葉を借りても
はるか遠い所にあるみたいで
そこまで歩いて行けますか
一生かかっても到達できない
国だそうです
あれこれと考えた末に疲れ
眠ってしまった
夢の世界で
幸せの国をみつけた
かつて絵本に描いてあった絵と
想像した定義と同じでした
憧れの窓明かりの下に
家族の笑い声が
確かにあったのです
幸せと言う様式を
今も探している

片桐歩詩集『美ヶ原台地』栞解説文
鈴木比佐雄
コールサック社
2011